平成19年度近畿自動車道名古屋関線（鈴鹿付加車線）建設事業発掘調査

東庄内Ａ遺跡（第２次）

2008（平成20）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県鈴鹿市東庄内町に所在する東庄内Ａ遺跡（第２次）発掘調査にかかる概報である。

2　調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

3　調査の体制は次のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱ課　課　長　田村陽一

主　幹　木野本和之

技　師　伊藤文彦

調査補助受託機関

株式会社ＧＩＳ中部

調査期間　平成19年７月27日～平成19年10月９日

調査面積　300㎡

4　調査にあたっては、地元の方々をはじめ、中日本高速道路株式会社、林建設工業株式会社、鈴鹿市教育委員会の協力を得た。

5　本書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課が行った。また執筆・編集は木野本と伊藤が行った。

6　現地の調査にあたっては、以下の方々から有益なご教示を受けた。（順不同・敬称略）

奥義次・谷本鋭次

7　当地は平面直角座標系第Ⅵ系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。磁北は座標北に対し西偏約６度50分である（平成12年国土地理院）。また座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。

8　当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

1　調査に至る経過……（木野本）……1

2　遺跡をとりまく環境……（伊藤）……1

3　調査の成果……（伊藤）……2

（１）第１次調査の概要……2

（２）遺構について……2

（３）遺物について……9

1　調査にいたる経過

近畿自動車道名古屋関線（東名阪自動車道）は接続する自動車専用国道25号・西名阪自動車道と共に、名神高速道路と並び名古屋・大阪の２大都市圏を結ぶ基幹道路である。この路線を通過する車両数は年年増加しており、鈴鹿・亀山間の日交通量はおよそ50,000台にものぼる。

平成20年３月には近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）の亀山東ＪＣＴ～草津田上ＩＣ間の供用が開始されるのに伴い、さらなる交通量の増加が予想された。特に亀山東ＪＣＴ上り線（名古屋方向）は約１kmの登り勾配となっており、合流部での渋滞発生が予想された。そこで、当該区間の交通容量増加を図り渋滞を緩和することを目的に、付加車線建設が計画された。工事内容を検討したところ、東庄内Ａ遺跡については幅約４ｍの切土による工事であることから、三重県教育委員会では保存が必要と判断。以後、中日本高速道路株式会社と三重県教育委員会の間で協議を重ね、東庄内Ａ遺跡については現状保存が困難であることから発掘調査を実施し記録保存を図ることで合意した。これを受け、平成19年４月１日付で中日本高速道路株式会社と三重県の間で当該路線を含む２路線の発掘調査に係る委託契約を締結。同年８月、三重県埋蔵文化財センターが現地調査に着手、９月下旬には予定の300㎡の発掘調査を完了した。（木野本）

2　遺跡をとりまく環境

東庄内Ａ遺跡（１）は三重県鈴鹿市東庄内町に所在する。鈴鹿山脈からは大小の河川が流出する。これら河川は東流して鈴鹿山脈から派生する台地を開析し、伊勢平野を形成して伊勢湾へ注ぐ。東庄内Ａ遺跡は、鈴鹿川の支流、八島川が開析した徳原台地の突端に位置する。

周囲には数多くの遺跡が点在するが、縄文時代の遺跡では早期から晩期まで各時期の遺跡が存在する。早期初頭の『大鼻式』土器で知られる亀山市大鼻遺跡では、早期前半の竪穴住居８棟、煙道付炉穴16基が検出された。亀山市北瀬古遺跡では続く早期後半から前期まで下る可能性のある土器が検出されている。中期では、東庄内Ａ遺跡に隣接する鈴鹿

第１図　東庄内Ａ遺跡及び周辺の遺跡(1:50,000) 国土地理院1:25,000地形図「亀山」「伊船」「鈴鹿」「四日市西部」を一部改変

市東庄内Ｂ遺跡（２）において竪穴住居や炉穴が検出されている。中期末から後期にかけての遺跡も散見される。亀山市地蔵僧遺跡（３）では中期末の土坑が２基検出されている。鈴鹿市西川遺跡では中期末の竪穴住居が、鈴鹿市起Ａ遺跡では中期末の土坑がそれぞれ検出されている。鈴鹿市北一色遺跡は縄文時代中期末から後期初頭、晩期の遺跡である。中期の竪穴住居のほか、晩期の合口土器棺墓を検出している。東庄内Ａ遺跡の１次調査においても同様に縄文時代中期末から後期初頭の土器が検出されている。晩期では鈴鹿市上箕田遺跡で突帯文土器が出土している。これまでのところ、東庄内Ａ遺跡を含めこの地域での縄文時代早期から後期の遺跡は、河川の両岸に展開する段丘上ないしは段丘の突端に立地するようである。縄文時代以降では、東庄内Ａ遺跡に隣接する青館跡（４）、古城城跡（６）と八島川南岸の峯城跡（５）が注目される。峯城は正平22年(1367)に国人領主関氏の一族、峯氏によって築城され、天正12年(1584)に羽柴秀吉軍の攻撃を受け、落城。青館跡・古城城跡は羽柴軍の陣城ともいわれるが詳細は不明である。(伊藤)

3　調査の成果

（１）第１次調査の概要

東庄内Ａ遺跡は東名阪自動車道路の建設に伴い、昭和43年度に第１調査が実施され、縄文時代後期の土坑、弥生時代の竪穴住居、時期不明の掘立柱建物を検出した。遺物としては包含層から縄文時代早期の押型文土器を検出したほか、土坑からほぼ完形に復元できる縄文時代後期初頭中津式の深鉢を検出したことが特筆される。このほか中世後期に属する陶器も出土した。

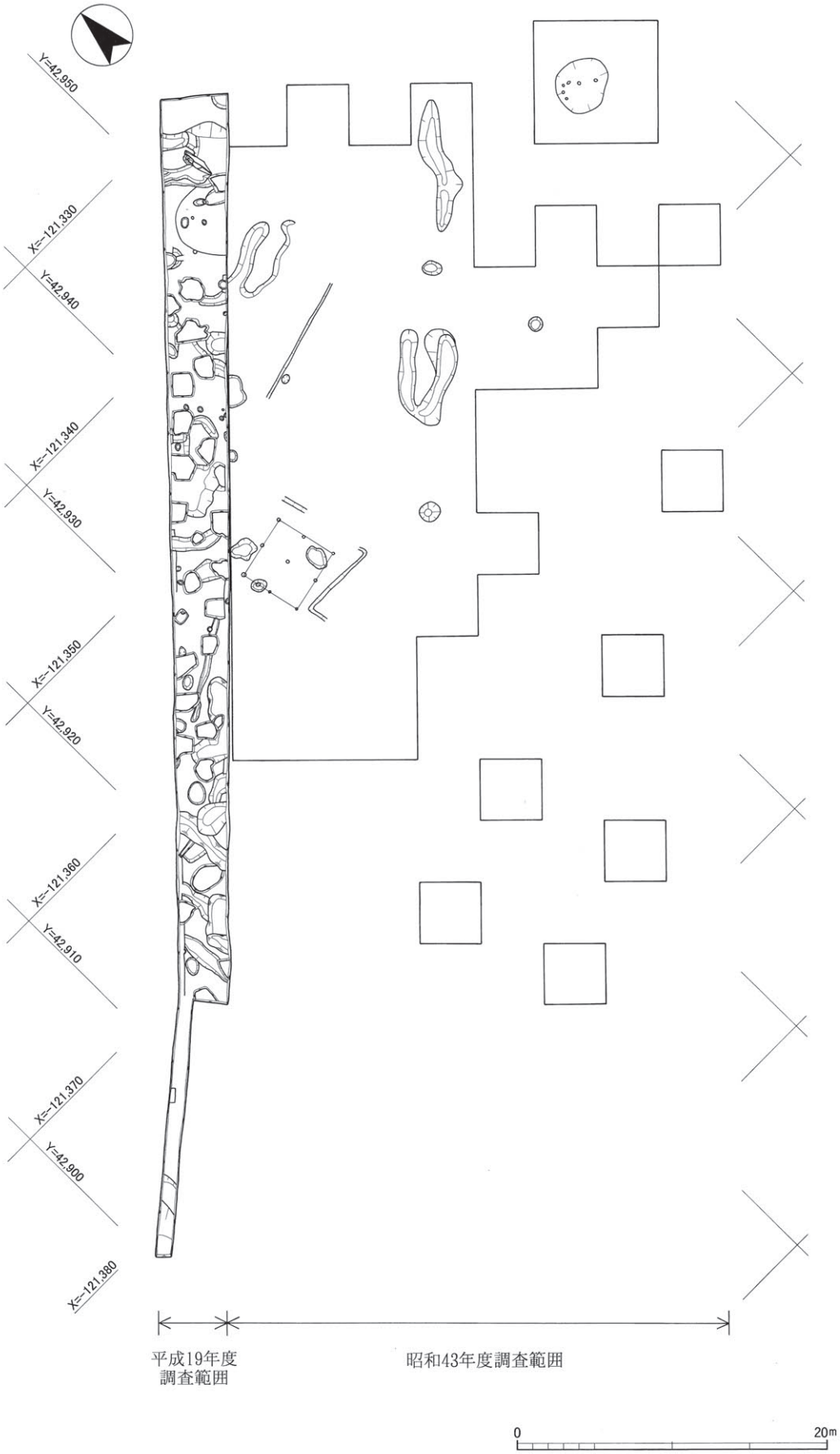
（２）遺構について

第２次調査では300㎡を対象に調査した。調査区は第１次調査の北西に隣接する地点に当たる。段丘上をＡ区、南側段丘崖をＢ区として調査区を設定。Ａ区では縄文時代の遺構を、Ｂ区では青館跡に関連する遺構の検出がそれぞれ期待された。調査の結果、Ａ区では、縄文時代の土坑ＳＫ11、煙道付炉穴ＳＦ35・37を検出した。また縄文時代早期、後期の縄文土器や、中世前期の土器片など、遺物も多数検出した。一方Ｂ区では表土直下が基盤層となり、遺構は

第２図　調査区位置図(1:5,000)

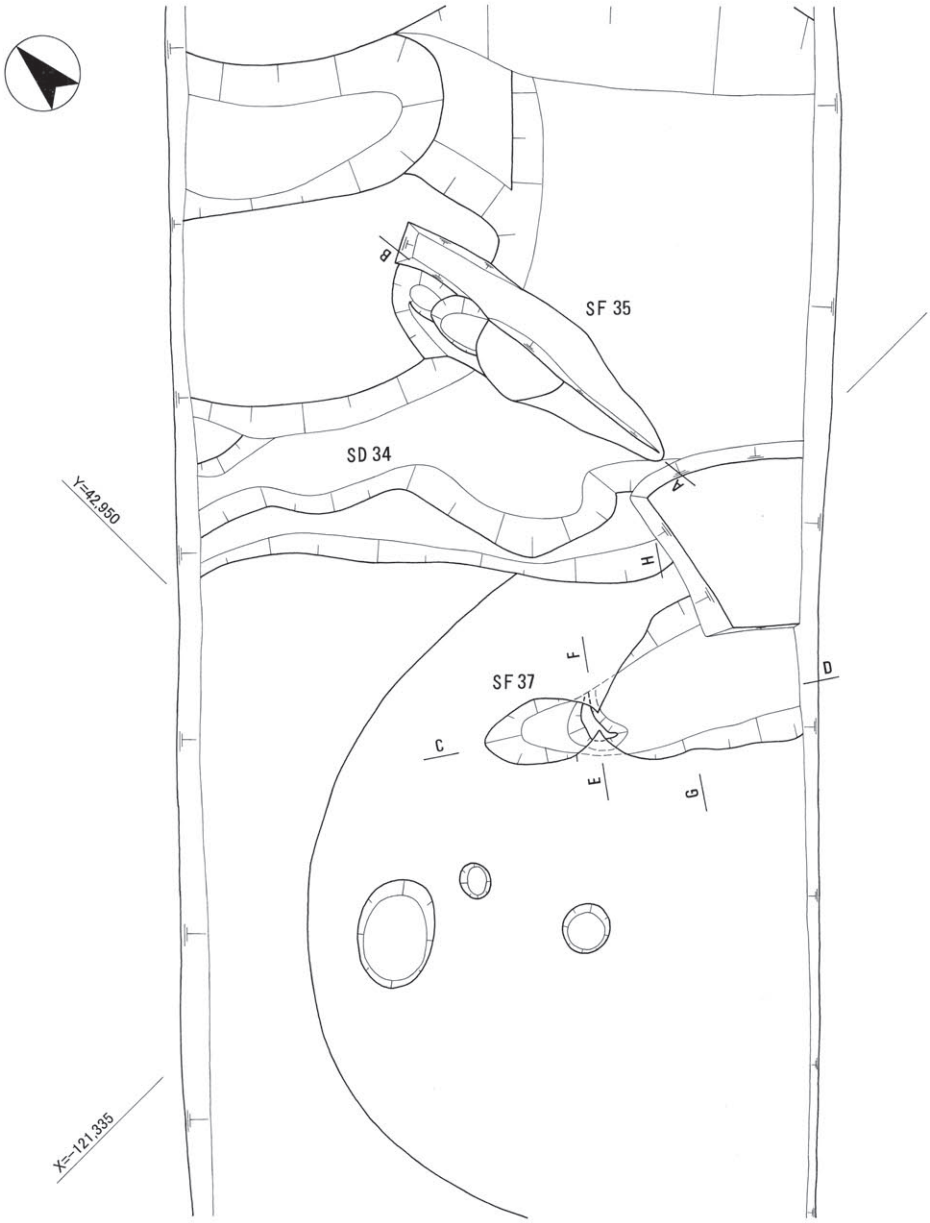
写真図版１　調査区遠景①（東上空から）

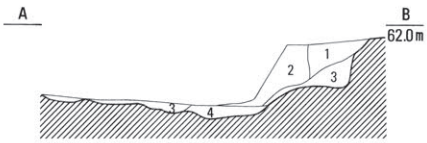
写真図版２　調査区遠景②（南上空から）

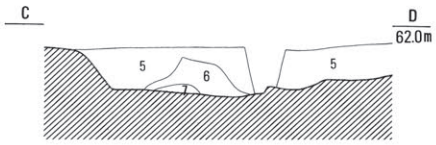


第３図　遺構平面図(1:400)

写真図版３　調査区全景（真上から）







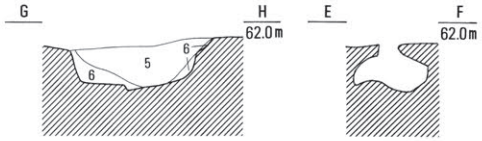
SF35

1．2.5Y5/3黄褐色砂質土にφ２mmまでの砂礫を3%含み、締まりよい

2．7.5YR4/2灰褐色砂質土にφ１mmまでの砂礫を3%含む

3．5YR6/3にぶい橙色砂質土

4．5YR6/6橙色砂質土。被熱のため堅くしまる（地山）



SF37

5．2.5Y5/2暗灰黄色砂質土

6．10YR3/4暗褐色粘質土しまり良い

7．5YR5/4にぶい赤褐色粘質土

0　2m

第４図　ＳＦ35・37平面図，断面図(1:50)

写真図版４　煙道付炉穴ＳＦ35（左）・煙道付炉穴ＳＦ37（右）完掘状況（北から）

写真図版５　煙道付炉穴ＳＦ35完掘状況（南東から）

写真図版７　煙道付炉穴ＳＦ37完掘状況（西から）

写真図版６　煙道付炉穴ＳＦ37検出状況（西から）

写真図版８　煙道付炉穴ＳＦ37完掘状況（南東から）

認められず、遺物も出土しなかった。

以下、今回の調査において最も注目される、煙道付炉穴２基について述べる。

煙道付炉穴ＳＦ37　調査区北東端付近で検出したもので、遺存状態がきわめて良かった。検出長2.1mで、南東端は調査区外へ続く。煙道部は長径0.75m、短径0.4mの楕円形を呈し、燃焼口部は幅1.0mのいびつな三角形を呈する。検出面からの深さは0.3mである。煙道部と燃焼口部をつなぐトンネル部は、幅0.45m、深さ0.2mのややいびつなアーチ状を呈する。遺構埋土は３層からなる。第1層は暗灰黄色砂質土で、炉穴廃絶後に堆積した層であると考えられる。第２層は暗褐色粘質土でしまりが良く炭化物を含む。堆積状況から煙道部と燃焼口部をつなぐトンネル部の上方に存在した土塊が崩落した可能性がある。第３層はにぶい赤褐色粘質土で、平面は三日月状を呈する。色調と堆積状況から、煙道付炉穴の機能時に堆積した層と考えられる。出土遺物は縄文土器のごく小片のみで、時期の特定は困難である。

煙道付炉穴ＳＦ35　ＳＦ37の北西２ｍの地点で検出した。検出時の全長は2.1m。溝ＳＤ34によって破壊されているため、平面形は判然としない。また燃焼口部と煙道部をつなぐトンネル部も不明瞭である。しかし土層断面の観察で、燃焼口部から煙道部へかけて連続するやや赤色化した灰褐色砂質土層を確認したため、煙道付炉穴と判断した。遺物は出土していないため時期については不明である。

こうした煙道付炉穴は、九州地方から関東地方にかけて確認されている縄文時代早期の炉の一形態で、三重県下ではこれまで５遺跡63基が確認されている。時期は縄文時代早期前半に限られ、今回の事例は亀山市大鼻遺跡以北では初めての確認例である[註]。今回検出した煙道付炉穴の時期については今後検討を要するが、遺跡の位置からも三重県内の縄文時代早期の社会を考える上で重要な遺構であると評価できる。

［註］　小濵学「三重県における縄文時代早期煙道付炉穴の諸相－多気町坂倉遺跡検出例を中心に－」『斎宮歴史博物館研究紀要十二』斎宮歴史博物館2003

写真図版９　Ａ区　調査前風景（北から）

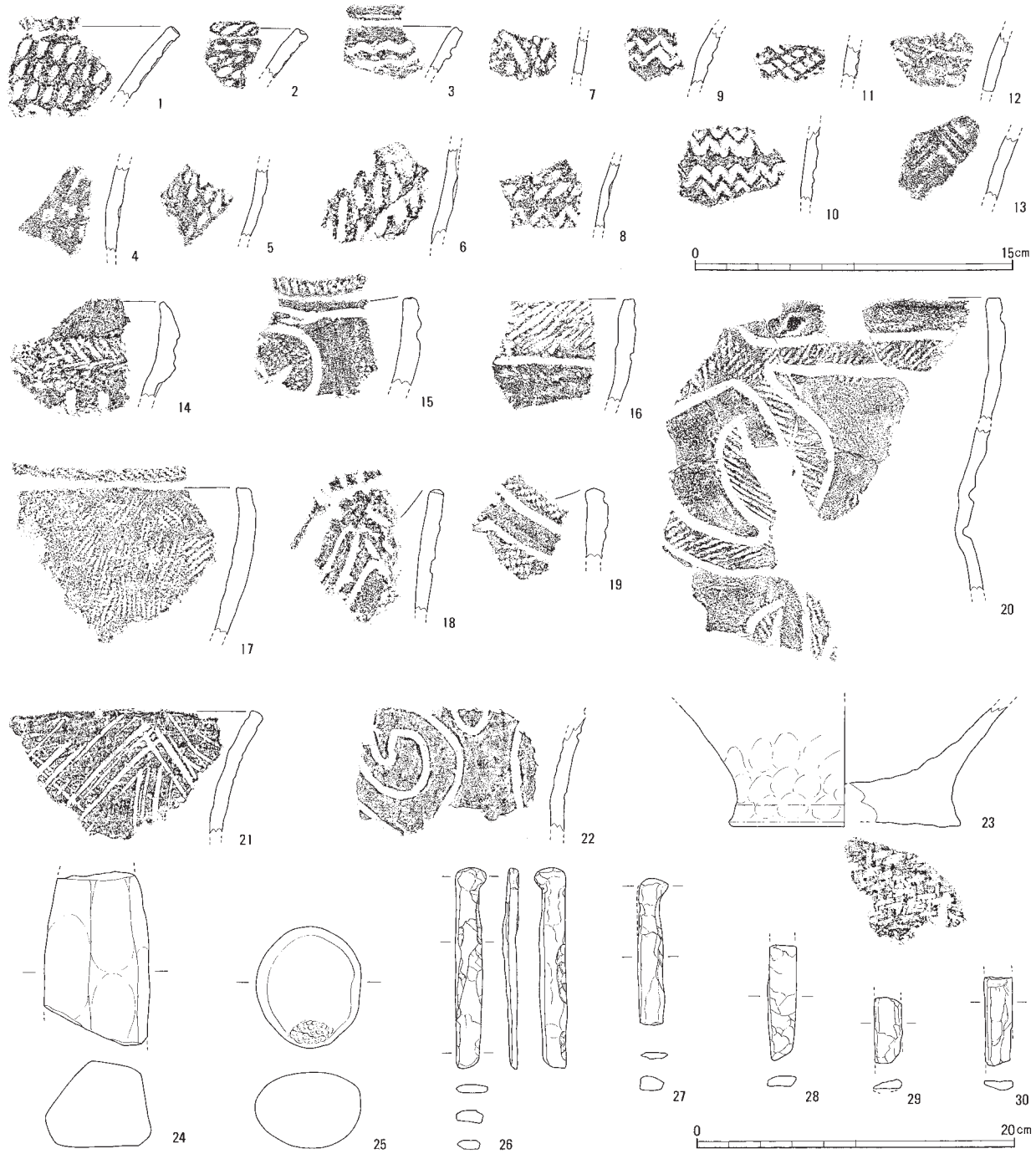
写真図版10　Ａ区　土坑ＳＫ11遺物出土状況

写真図版11　Ｂ区　完掘状況

写真図版12　調査区全景（南から）

（３）遺物について

今回の調査では、整理箱にしておよそ23箱の遺物が出土した。遺物のほとんどが縄文土器である。土器は早期に属するもの（１～13）と、中期末から後期初頭に属するもの（14～23）がある。早期に属する土器はいずれも押型文土器である。口縁部の破片は３点図示した。いずれも口唇部に端面を持つが、口唇部に施文するもの（１・２）と無文のもの（３）がある。外面の施文としては刺突文（４）、ネガティブ楕円文（１・２・４～８）、格子文（11）、山形文（３・８～10、12）、綾杉文（13）がある。また施文が非常に浅いものがある（12・13）。いずれも小片で断定は出来ないが、口縁端部の形状や施文の深さに注目すれば、ほとんどが大川式に属すると考えられる。なお、山形文が一定量含まれることは、南勢地方とは異なった様相を示しており注目される。縄文時代中期末から後期初頭に属する土器は、今回の調査で最も多く出土しているが、このうち10点を図示



第５図　出土遺物実測図（土器１～23　Ｓ＝１：３，石器24～30　Ｓ＝１：４）

した。口縁部片には平縁のもの（14～17、20、21）、山形口縁となるもの（18）、波状口縁となるもの（19）がある。また平縁のものには口縁部が内彎するもの（14～17、20）と外反するもの（21）があり、口唇部に縄文を施文するものもある（15・17）。また体部外面の文様については、典型的な中津式の文様構成をとるもの（19・20）がある。また磨消縄文とならず、沈線のみで施文されるもの（22）もある。底部片（23）には編物の痕跡が明瞭に残存するが、同様の痕跡は図示した以外の遺物にも認められた。14は中期末、18は中期末から後期初頭、その他は後期初頭に属すると考えられる。

石器は土器に比べて出土量が少ない。磨石（24）やタタキ石（25）のほか、刀子形不明石製品（26～30）がある。時期は不明であるが、いずれも縄文時代の遺物であろう。なお、縄文時代以外の遺物は中世の土器がわずかに出土したにとどまった。

今後、整理作業を通して遺物の全体像をより明らかにしていきたい。（伊藤）

概報遺物番号	実測図番号	グリッド	出土遺構出土位置	制作・調整技法の特徴	色調	胎土	型式名所属期
1	2 － 1	A8	SK22	口唇部:円棒具による右からの刺突 口縁部外面:ネガティブ楕円文　頸部:山形	(外)灰黄褐色10YR6/2 (内)にぶい黄橙色10YR7/3	密(～2.5㎜の砂粒・雲母を含む)	早期大川式
2	2 － 2	A8	SK22	口唇部:ヘラ状工具による右からの刺突 口縁部外面:ネガティブ楕円文	(外)にぶい黄橙色10YR7/4 (内)にぶい黄橙色10YR7/4	密(～2.5㎜の砂粒含む)	早期大川式
3	1 － 12	A8	SK22	口唇部:無文、沈線？ 口縁部外面:山形文	(外)にぶい黄橙色10YR7/4 (内)にぶい黄橙色10YR7/4	密(～2㎜の砂粒含む)	早期大川式
4	1 － 2	A8	SK22	頸部:円棒具による右下からの刺突 体部:ネガティブ楕円文	(外)にぶい黄橙色10YR6/3 (内)浅黄橙色10YR8/4	密(～1㎜の砂粒・雲母を含む)	早期大川式
5	1 － 5	A9	SZ19	小粒なネガティブ楕円文	(外)にぶい黄橙色10YR6/3 (内)にぶい黄橙色10YR7/3	密(～2㎜の砂粒含む)	早期大川式
6	1 － 3	A4	包含層	大粒なネガティブ楕円文	(外)にぶい黄橙色10YR6/3 (内)にぶい黄橙色10YR7/3	密(～1㎜の砂粒・雲母を含む)	早期大川式
7	1 － 10	A8	SK22	ネガティブ楕円文	(外)にぶい黄橙色10YR7/3 (内)にぶい黄橙色10YR7/3	密(～1㎜の砂粒含む)	早期大川式
8	1 － 6	A4	包含層	口縁部外面:ネガティブ楕円文 頸部:山形文	(外)浅黄橙色10YR8/3 (内)にぶい黄橙色10YR7/3	密(～2㎜の砂粒含む)	早期大川式
9	1 － 9	A5	包含層	山形文	(外)灰黄褐色10YR5/2 (内)にぶい黄褐色10YR5/3	密(～4㎜の砂粒含む)	早期大川式
10	1 － 8	A8	SK26	体部:山形文	(外)にぶい黄橙色10YR6/3 (内)にぶい黄橙色10YR6/3	密(～1.5㎜の砂粒多く含む)	早期大川式
11	1 － 4	A7	包含層	菱形格子目文	(外)にぶい黄橙色10YR6/3 (内)灰黄色2.5Y7/2	密(～1.5㎜の砂粒・雲母を含む)	早期神宮寺式
12	1 － 11	A8	SK22	浅い山形文	(外)にぶい橙色7.5YR7/4 (内)にぶい褐色7.5YR6/3	密(～2.5㎜の砂粒含む)	早期神宮寺式以降
13	1 － 1	A8	SK22	浅い綾杉文	(外)灰黄褐色10YR6/2 (内)灰黄褐色10YR6/2	密(～1㎜の砂粒・雲母を含む)	早期神宮寺式以降
14	2 － 7	A9	SK11	口縁部外面:肥厚、区画帯、綾杉文、沈線 内面:ナデ	(外)にぶい黄褐色10YR5/3 (内)にぶい黄橙色10YR6/3	密(5㎜の石・～3㎜の砂粒多く含む)	中期末
15	2 － 4	A3	包含層	口唇部:縄文 外面:沈線、縄文　内面:ナデ	(外)灰黄褐色10YR6/2 (内)灰褐色7.5YR5/2	密(～2.5㎜の砂粒・雲母多く含む)	後期初頭
16	2 － 3	A5～10	機械掘削	外面:縄文(1段のL)、沈線　内面:ナデ	(外)灰褐色7.5YR5/2 (内)にぶい黄橙色10YR7/4	密(～2.5㎜の砂粒・雲母を含む)	後期初頭
17	3 － 1	A1	包含層	口唇部:縄文　外面:縄文(2段のRL) 内面:ナデ	(外)にぶい黄橙色10YR7/3 (内)にぶい黄橙色10YR7/4	密(～3㎜の砂粒多く含む)	後期初頭
18	2 － 6	A2	包含層	口縁部:山形口縁　口唇部:刻目 外面:沈線　内面:ナデ	(外)にぶい橙色7.5YR7/4 (内)にぶい褐色7.5YR7/4	密(～2㎜の砂粒・雲母を含む)	中期末～後期初頭
19	2 － 5	A2	包含層	口縁部:波状口縁　口唇部:縄文 外面:磨消縄文(1段のL)	(外)にぶい黄橙色10YR7/3 (内)にぶい黄橙色10YR7/3	密(～2㎜の砂粒含む)	後期初頭
20	5 － 1	A9	SZ19	外面:2段Ｊ字形磨消縄文(1段のL) 内面:ナデ	(外)灰黄褐色10YR5/2 (内)にぶい褐色7.5YR5/3	密(～2㎜の砂粒含む)	後期初頭
21	3 － 2	A4	包含層	外面:沈線　内面:ナデ	(外)浅黄橙色10YR8/4 (内)にぶい黄橙色10YR7/4	密(～2.5㎜の砂粒多く含む)	後期初頭
22	3 － 3	A9	SZ19	外面:沈線　内面:ナデ	(外)褐灰色10YR4/1 (内)浅黄橙色10YR8/3	密(～2㎜の砂粒含む)	後期初頭
23	3 － 4	A9	包含層	底面:蓆文　外面:ナデ　内面:ナデ	(外)にぶい黄橙色10YR7/3 (内)にぶい橙色7.5YR6/4	密(～1.5㎜の砂粒含む)	後期初頭

第１表　出土土器観察表

概報遺物番号	実測図番号	グリッド	出土遺構	種類	長さ	幅	厚さ	重さ
24	4 － 6	A3	包含層	タタキ石	11.0㎝	6.7㎝	5.4㎝	650g
25	3 － 5	A13	包含層	磨石	7.7㎝	6.5㎝	4.8㎝	335g
26	4 － 1	A9	包含層	刀子形不明石製品	12.7㎝	2.0㎝	0.9㎝	60g
27	4 － 2	A9	包含層	刀子形不明石製品	9.3㎝	1.9㎝	0.9㎝	20g
28	4 － 4	A9	包含層	刀子形不明石製品	7.3㎝	1.8㎝	0.7㎝	24.5g
29	4 － 3	A9	包含層	刀子形不明石製品	4.2㎝	1.8㎝	0.7㎝	7g
30	4 － 5	A9	包含層	刀子形不明石製品	5.5㎝	1.8㎝	0.7㎝	20g

第２表　出土石器観察表

平成19年度近畿自動車道名古屋関線
（鈴鹿付加車線）建設事業発掘調査

東庄内Ａ遺跡（第２次）

2008年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　株式会社アイブレーン

表紙写真：東庄内Ａ遺跡遠景（南上空）